
時と海と風と
リラ・レルロ

暁～小説投稿サイト～ By 肥前のポチ

<http://www.akatsuki-novels.com/>

注意事項

このPDFファイルは「暁々小説投稿サイト」で掲載中の小説を「暁々小説投稿サイト」のシステムが自動的にPDF化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「暁々小説投稿サイト」を運営する肥前のポチに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

時と海と風と

【作者名】

リラ・レルロ

【あらすじ】

人々に称される通り世界最強であろうとする男が、自由気ままに旅をして、時々ルフィたちと関わったりする話。

アルマ・クラストールという男

草木の一本も見当たらない砂とごつごつした岩だらけの無人島に、四人の男たちが立っていた。

彼らの容姿は様々で、身の丈二メートル五十センチを超える大男、それすらも上回る巨漢、はたまた一般的成人男性程度の背丈の者もいる。

そんな四人は互いが互いに向かい合っているわけではなく、また四人全員が肩を並べている訳でもない。三対一。その構図だ。

そして付け加えるならば、『三』とは海軍本部最高戦力と称される大将の三人、『一』とは見た目歳若い一人の青年のことを指す。

「よう。三大将が揃いも揃って、一体俺に何の用だい？」

青年が他三人へと問いを投げかける。しかし、問いの形を取っていながらも彼にはその答えが分かっているのか、口の端は皮肉げに吊り上がっていた。

西から吹いた風が彼の黒髪を撫ぜ、前髪の下からは楽しげな光を灯した黒曜石のような漆黒の瞳がちらちらと覗く。

海軍——絶対正義を掲げ、海賊を代表とした世に蔓延る悪を討滅せんとする全世界規模の軍隊。その巨大な組織における最高戦力こそが今ここにいる三人、海軍本部大将だ。そしてそんな実力者たちと対面しているにもかかわらず、青年の態度は微風を受ける柳のご

とく飄然としていた。

それは、たとえ三大将が相手であろうと己が敗れるはずがないといういっそ傲慢なまでの自負がゆえである。

青年からの問いに対し、並々ならぬ闘志を漲らせながら彼と相対する男たちのうちの一人――海軍本部大将センゴクは簡潔に言葉を返した。

「貴様を、捕えに来た」

「ははっ、そうかい。まあ頑張ってくれや」

カラカラと笑いながら青年は軽く流す。やれるものならやってみろ、そんな彼の心の声が聞こえてくるようだった。

そんな掴みどころのない青年の様子も意に介さず、センゴクは静かに自分たちの意志を告げる。あたかもそれが決定事項であるかのように。

「悪いが今日こそは縄についてもらうぞ、『刻針』の」

押し詰められたその声に一体どれだけの決意が籠っているのか。決して大きな声ではなかったというのに、それは十メートル余り離れたところに立つ青年の耳にもよく届いた。

「おや、そちらさんは随分とやる気のようにだ。……ふむ、なんだい。お前さんたち、もしかして俺を相手に本気で勝つつもりかね？」

「無論。洒落や気まぐれで大将三人を集めるはずもあるまい。貴様を倒すためだけにこれだけの戦力を注ぎ込んだのだ、なんの成果も

なしにおめおめと帰るわけにはいかん」

「はっは、そりゃまたご苦労なことだ」

「ふん、笑っていられるのも今のうちだ。今回、我らは本気なのだから」

「あーまあ、お前さんたち海軍にゃ俺はかなり美味しい獲物だもんなあ」

青年は自身の立場を理解している。

世界最強。

海軍から多額の懸賞金を賭けられなおかつこの広い海の世界でも強い者と呼ばれている海賊が、現在は仲間も作らずたった一人で旅を続けているのだ。昨今大海賊時代とまで呼ばれるようになってしまった世界の流れへ歯止めをかけるのに、これほど狙いやすい獲物もいまい。時の大海賊白ひげでは配下が多すぎて手が出せないが、単独行動を続けなおかつ知名度の高い彼であれば、捕えることのメリットがそのための労力を上回ると判断したのだろう。

そして青年は、そんな向こうの思惑を理解できるからこそ思う。

(……舐めんじゃねえよ、世界政府)

世界最強その名より、三大将を上に見る。その傲慢が気に入らない。

彼は自身が誰よりも強いという自負を持つがゆえに、他者の驕りを認めない。だから教えてやるのだ。お前たちが一体誰に喧嘩を売

ったのかを。

刻針海賊団船長。世界最強の男。懸賞金額九億六千万ベリー。そんな男を大将三人ぶつけた程度で捕えられると思っ**て**いるのなら、勘違いも甚だしい。

己おのが矜持を侮辱されたという怒りがふつふつと滾る。しかしそれを決して相手には悟らせず胸の奥だけに秘めて、青年は口を開いた。

「そうさなあ。たしかに、お前さんらが背負ってるもんも相当重いら
んだろう。決して譲れやしないんだろう。……だがな、それでも――」

ああ、それでも変わらない。それだけは決して変わってはならないのだ。

笑え。

不敵な笑みを浮かべ、彼は世界も震えよと宣言する。

「――勝つのは、俺だ」

「――ツツツ！！」

気圧されたように大将たちが半歩下がった。まだ戦いは始まって

もないというのに、張り詰めた緊張感で額に汗がにじみ出している。

「さあ、海軍の威信と最強の名を賭けた大勝負といこうじゃねえか」

青年は腰に下げた刀の柄へとそっと手を添えた。銘を『星嵐』。最上大業物工の一振りに数えられるその刀は、ただひたすらに強度と切れ味のみを追求した結果生まれた逸品だ。漆黒の刀身にまるで星空のような銀の光の粒が散っているためこの名がつけられた。

剣気とも呼ぶべき斬るという意志を握る刃へと束ねていき、青年は戦闘開始の合図となる名乗りを上げる。

「世界最強、刻針、アルマ・クラストール。推して参る——」

「……っ！ 我らとて、正義の名を背負う以上負けるわけにはいかんのだっ！！ だから貴様はここで終われ刻針！！」

海軍の威信を賭けて。センゴクの咆哮と共に他二人の大將たちも一斉に戦闘態勢へと入る。

青年、アルマはその魂の叫びとも言わべき雄叫びを正面から受け止め、その上でそれを叩き潰すと決めた。

戦うからには容赦はしない。そうとも、始めから全力だ。

彼我の差、約十五歩。されど一足で事足りる。

「死ぬ気で構えときな。じゃねえと——」

「……！！？ ちいっ！！」

大将たちが彼の動きを認識した時にはもう遅い。すでにアルマは神速の踏み込みを終えている。そこから放たれるは斬撃の極致、世界で誰にも止めること叶わぬ絶対無比の大閃断。

【無限刹那】

「――案外あっさり死ぬぜ？」

彼が放った一閃は、大将たちの知覚可能速度の限界すらも凌駕した。

* * *

この日偉大なる航路の名も無き島で行われた戦いのことを知る者は少ない。
グランドライン

何故ならば、戦いの結果が紛れもない海軍側の敗北だったからだ。威信を賭けた戦いの結果が完敗。それを世界政府が全世界へと公表出来ようはずもない。

大将二名は瀕死の重傷、残る一名も軽くない怪我を負い三大将全

員が撤退。海軍の最高戦力たちをまとめて破った刻針のアルマは、その後、大将たちのバックアップに来ていた軍艦の包囲網を強引に突破しそのまま姿をくらませた。

そうしてこの翌日より、刻針のアルマの懸賞金額が更に一億ペリ―余り上乘せされることとなる。

【WANTED】

「刻針」アルマ

懸賞金額 十一億ペリ―

生死問わず

DEAD or ALIVE

刻針海賊団とフーシャ村

〓七年後〓

海一面の深い青と空一面の遠い青に挟まれて、一隻の大型船が海面を走っている。

風は弱く、雲は一つとしてない。穏やかで、実に気持ちの良い一日だった。

そんな昼寝日和と言うほかない陽気に満ちた真昼間。張られた帆に緩やかな風を受け進む船の甲板には、ビーチ用のリクライニングチェアの背もたれに体重をかけたまま瞼が落ちかけている男の姿があった。

「あ……………眠い^{ねみ}」

というか、俺こと「刻針」アルマ・クラストール様である。

しかし、さしもの世界最強も暖かな陽気とそれによって迫りくる眠気には敵わない。このままあと数分もすれば完全敗北を喫するであろうことは明白である。もとより戦う気がないのだが。

…………と、背後に人の気配。

「随分眠そうね、アルマ」

「おう、ロビンか。いやあ、朝日が出るまでずっと釣りしてたもん

でなあ。実は二時間も寝てねえんだ」

後ろから掛けられた若い女の声に、俺はひらひらと軽く手を振りながら答えた。こうでもして体を動かさなきゃあ会話の途中で意識が落ちてしまいそうである。

声をかけてきたのは今年で二十歳になる黒髪の女、ニコ・ロビン。非常に頭がよく知識も豊富なため、この船における頭脳的役割を果たしている。

「寝不足になりすぎて脳溢血でいきなり死んだりしないかしら……」
「いきなり恐ろしい事言うんじゃないよ」

突然俺の死を予言し始めるロビンに流石の世界最強もびっくりである。ちょっと目が覚めちゃった。

「それで本題なのだけれど、そろそろ目的の島に着くわよ」
「あー、はいよ。やっとかい。そんじゃまあ、そろそろ俺も目え覚ますとするかね」

背もたれから体を起こしグッと伸びをすると、背骨がポキポキと小気味よい音を奏でた。大分寝足りんが、まあ仕方ない。船長就寝中の島到着ほど締まらないものもないのである。

ここは最弱の海とも呼ばれる海域、グランドライン東の海。イーストブルー

つい先日まで偉大なる航路にいた俺たち刻針海賊団は、現在その航路を外れてこの世界で一番優しい海へと来ていた。突発的に異常気象が起こったりもせず、海賊も少なく、その少ない海賊の質も極

めて低い海。平和の象徴ともされるこの海域を俺たちが訪れたのは、俺がとある人物に会うためである。

「さてさて。シャンクスの言ってた面白いガキンチョってのは一体どんな奴かねえ」

「知人との話題に上がった子供一人を見るためだけに偉大なる航路グランドラインを出る人間なんて、世界中探してもきつとあなたくらいのものね」

俺の隣でロビンも朗らかに笑っている。船に乗ったばかりの頃は俺の言葉一つで右往左往していたくせに、今じゃ笑顔を浮かべる余裕すらあるくらいだ。俺の突拍子もない行動などもう慣れたものなのだろう。すでにこいつとは何年もの付き合いである。

「おいおい、そりゃただのガキなら俺もそこまではしねえさ。……多分だが」

「最期の一言で前半の言葉の信憑性がガタ落ちよ？」

「まー気にすんな。……でだ。あのシャンクスが片腕を捨ててまでも助けたガキだぞ？ こりゃ気にするなって方が無理だろうよ」

「それは、たしかにそうね。赤髪は最近の勢いある若手海賊の代表格、おまけにあの海賊王の船に乗っていたのでしょう？」

「おう。つっても当時は見習いだったがな。それでもその頃からすでに中々面白いやつでよ、俺がロジャーの船に喧嘩売りにいった時とかは真っ先に突っ込んで来たりしやがるんだ、あいつ」

まあ毎回一発で吹き飛ばして終わりだったがな。わはは。そりゃ世界最強にたかだか十五歳程度の若造が挑んでもそうなるだろうよ。だが、最近のあいつならもう一発KOじゃあ済まんだらうなあ。

どうやら順調に実力をつけてきているようだ。先日数年ぶりに再会した時には、纏う雰囲気はかなり洗練されてきてやがった。

「いつの間にやら霸王色にも覚醒してやがるし……今はまだ名を上げ始めたばかりだが、ありゃあっという間に上まで登ってくるな」
「ふふ、私はまだそれほど面識もないけれど、あなたが言うならきっとそうなのね」

霸王色の覇気——数百万人に一人の確率で身に付けられるという王者の力である。直接戦うまでもない格下はこの力を使って威圧するだけで意識を失うため、雑魚を間引くには非常に便利だ。名だたる海賊の多くはこの覇気を身に付けており、彼^かの有名な海賊王、ゴール・D・ロジャーもまた然り。

そしてその力を持っているということは、シャンクスもまた海賊の高みへと至るだけの資質を備えているということなのだろう。あいつが俺たちと同じ舞台まで登ってくる日が心底楽しみだ。

「それにしても、海賊王の船に一人で挑んだ人間も多分あなたくらいのものじゃないかしら」

「まあ流石に滅多に勝てなかったがな。ロジャーとレイリーが組むと流石の俺でもちときつかったもんで」

「……むしろたまに勝っていたことに驚いたわ」

「ふふん、どうでい。そら、褒めたくなかったか？ 称えたくなかったか？ んん？」

「それはそれとして……今日のお昼は何かしら」

こいつ、さらっと流しやがった。最近ロビンの俺に対する対応が

おざなりになってきているような気がするんだが……ううむ、反抗期であろうか。まったく、困ったもんだぜ。

「どうせもうすぐ島に着くんだ。飯はそこで食おうや」

「あら、それじゃあエドックには昼食は作らなくていいと伝えておくわね」

「おう、任せたぜー」

エドックとはこの船のコックを務める男のことである。料理の腕は大したもので、この船の台所事情は奴に一任している。さらに非常時には戦力としても働けるなかなか有能な奴なのだが、万一相対した相手が幼女だった場合は一方的に敵の攻撃を受けるだけのゴミクズと化してしまう。つまるところ変態^{ロリコン}である。

そのためあいつが幼女と戦うことになったときは俺が問答無用でその幼女をぶっ飛ばすのだが、そうすると今度は船長である俺に攻撃を仕掛け始める始末。自分の船の船長に攻撃を仕掛けるとは何事だ、あのアホめ。

ロビンは船室の中へと入っていった。恐らく言葉通りエドックに昼食のことを言いに行ったのであろう。

「はて、さて……」

俺は立ち上がって船の遠く前方を見据えた。

「つぎ、ドーン島フーシャ村へ」

船は風に押されて進む。

目的の島は肉眼でも小さく見えるところまで来ていた。

* * *

「いない？」

「ええ、そうなんです」

村から少し離れた所に船を停泊させて徒歩でフーシャ村へと入った俺たちは、それぞれ分かれて行動を開始した。買い出しやら何やらである。ちなみに俺は目的の少年、ルフィを探している。が、ためしに入った酒場で店主の嬢ちゃんに聞いてみたところ、どうやらルフィ少年は現在村を離れているんだそうだ。というのも、彼の祖父の意向でダダンという山賊の一味に預けられているかららしい。

ううむ、どうやらルフィ少年の祖父とやらは随分と破天荒な人物のようである。幼少期から山賊に育てさせるとは、自分の孫をそれほどまでに悪の道に引きずり込みたいのだろうか。祖父は滅多に島にいない人物らしいので、おそらくは海賊なのであろう。見上げた海賊魂である。

「それにしても、船長さんーあ、シャンクスさんですわーとお知り合いの方だとは思いませんでした」

「いやあ、あいつが自分の腕をかけても惜しくないと言い切ったが

キなんでな。どうにも会ってみたくなくなったのよ。それでわざわざ船走らせてきたってわけで」

例のガキンチョについて語るシャンクス表情は、こいつもこんな顔できる歳になったんだなあ。時間の流れを俺に感じさせるものであった。

俺がそれまで知っていたシャンクスは、いつだって自分がひたすら前へと突き進むことだけに精一杯でそれ以外はほとんど見えていなかった。だというのに、今のあいつは自分の後ろに続く者の存在を認識し、さらに道を示すことまでやりとげている。まったく、あいつも大人になったものである。

「そんで、そのダダンとかいう山賊は一体どこにいるんだね？」

「村の裏にあるコルボ山というところなんですけど……あの、明後日ルフィたちの様子を見に行こうと思ってますから、その時ご一緒にますか？」

「おお、そりゃあいい。別に急いでるわけでもないんで、しばらくはこの村に滞在させてもらおうかね。っつーわけで明後日は道案内頼まあ」

と言っても見聞色を使えば一発で山賊のアジトを発見できるので、まあ嬢ちゃんがわざわざ案内してくれるというのであればその好意を無碍にすることもあるまい。

「もしなんか都合悪くなったりしたら、俺かうちのクルーにでもそう伝えてくれや。うちの船は強面なやつもいねえから声掛けやすいである」

大型船を使っている割にうちの船の乗組員は総勢四人である。俺、ロビン、エドックと、もう一人子供と言える年齢の少女がいるだけ。エドックはごくごく一般的な成人男性程度の体格で、顔立ちもそこから辺にいなさな感じ。ロビンは言わずもがな。最期の一人などまだ子供であるため、まあこれほど親しみやすいメンツの揃った海賊団もなかなかないである。

俺の見た目も、ちょっとカッコいいだけの普通の青年である。うむうむ。

この人数だと船を動かすのが少々大変だが、そこら辺はなんとかやっている。ロビンが体の各部位を好きな場所に生えさせるハナハナの実の能力者であるため、物理的に手が足りなくなることはないのだ。

「ふふ、それじゃあ明後日はよろしくお願いしますね」

「おう、道中の護衛は任せとけい。ああそれと、あとでうちのクルーたち連れて飯食いに来ると思うんでそんなときゃよろしく」

「ええ、お待ちします」

ようし、話はまとまった。つーわけで村ん中に散らばってるクルーたちを集めねばならん。村はそう大きくないので探すにも苦労はしないである。最悪見聞色を使えば一発で居場所が分かるため、なんにせよ問題はない。そもそもロビンは船の番をしているので、村の中で探すのは二人だけである。

そう考えながら酒場の出口へ向かおうとしたところで、しかし店

主の嬢ちゃんが喉の奥に小骨が引っかかった時のような面持ちで問うてきた。

「ところで、あなたの顔にちょっと見覚えがあるんですが……どこかでお会いしました？」

「うん？ あーまあ、気になるんなら新聞見りゃ分かると思うぜー」

最期にそんなやり取りをして俺は酒場を後にした。それから数分後酒場内から歳若い女子の悲鳴ともつかぬ仰天の声上がるのだが、それは余談である。最弱の海に俺みてえな大物がいるとは夢にも思わなかったのである。わはははは。

でだ。

「船長」

「おう、どうした」

酒場を出ると、両手に食材入りの買い物袋を下げたうちの料理担当が深刻そうな表情で声をかけてきた。どうやら酒場の前で俺のことを待っていたらしい。探す手間が省けたのはありがたいのだが、はて、何か問題でも起こったのであろうか。

「この村には――――幼女が一人もいないみたいだ」

「さっさとくたばれやてめー」

一瞬でも村になにか異変があったのかと警戒した俺が馬鹿だった。

こいつはアホであるからして、真面目に相手にするだけ無駄なのである。ちなみに、こいつのストライクゾーンは大体八歳から十三歳付近。十五を超えると年増、二十を超えるとババアらしい。とんでもねえな。エドックは現在二十一歳である。海軍呼んだ方がいいのであろうか。

「死ぬなら、可愛い女の子の腕に抱かれてがいいな……。あ、歳は十一で」

「ようし、お前さんの望みは叶わねえ。今ここで果てやがれ」

——そーれいっ！

——ああああああああ………。

村に男の悲鳴が響き渡った。俺に蹴り飛ばされたエドックである。数回バウンドののち地面を二十メートルほど滑走して止まったが、やつご自慢の青髪は土だらけ。ふふん、ざまあみる。

世のため人のため性犯罪者撲滅とは、うむうむ、海賊でありながら実に見事な善行である。正義は我にあり。俺は晴れ晴れしい顔で額の汗を拭った。別に汗は掻いていなかった。

念のため言うておくが、エドックが持っていた買い物袋は蹴り飛ばす寸前にぶんどっておいたので無事である。今後の俺たちの飯となるものをぐちゃぐちゃにするわけにもいかん。

地面に倒れ伏したエドックへと近づき、げしげしと蹴りつけながら話しかける。

「……で、酒場での聞き込みの結果ルフィ少年の居場所は分かったんだが、どうやら今は村にいないらしい」

「ごふっ、ちょ、船長……そろそろ蹴るのやめて……。僕には幼女以外に蹴られる趣味はないから……」

「なもんで、とりあえずこの酒場で昼飯食うぞ。ルティア回収すっからフラフラすんなよ」

「……うん、了解だよ。そもそも幼女のいない村に用なんかないさ。しっかりついていくから心配しないでほしい」

色んな意味でこいつはもう手遅れだと思った。

俺が蹴るのをやめたため土を払いながらのそのそと立ち上がるエドックに、俺は諦観と諦念と諦めが入り交じった目を向ける。うん、こいつはもうほっとこう。

さて。今名前が出たルティア、こいつが俺の船の最後のメンバーのことである。現在十四歳であるため辛うじてエドックのストライクゾーンからは外れている。といっても、エドックもルティアも数年前から俺の船に乗っているため、去年までの何年かはエドック節が猛威を振るっていたのだが。

心底困った様子で迫りくるエドックを押し留めるルティアの様子は、なんとというか、見ているだけで涙を誘うものであった。ルティアよ、力ない俺をどうか許して欲しい。俺にはこの変態を止めることなど到底不可能だったのである。なんだか笑いながら眺めていただけで止めようとしたことなどなかったような気もしないでもないが、別にそんなことはなかったはずだ。うむうむ。

そんなことを考えながら歩いているうちに、俺は件の人物を発見

ルティア

した。

ルティアは先ほども言った通り十四歳。金髪を肩に掛からない程度で程度で切り揃えている。体格は同年代の少女と比べてもやや小柄で、その華奢な見た目は軽く小突いただけで折れてしまいそうなほどだ。まあ、実際貧弱なのだが。

戦闘能力で言えば、そこらの雑魚に負けることはないものの億クラスの海賊相手では逃げることも不可能。数千万クラスでもよほど上手く戦わない限りまず勝てないだろう。つっても、戦いには別に期待しじゃないのでそこはどうでもいい。

「よう、首尾はどうだね？ ……ってまあそんなもんか」

ルティアは買い物に行くと言っていたが、村の規模が小さいためそれほど買い物らしい買い物も出来なかったようだ。小さな買い物袋一つしか持っていない。まあ物足りなければあとで町に行けばよかる。

「アルマさんがお探しのルフィ君ですが、今は裏山の山賊のところに預けられているそうですよ」

ルティアが苦笑しながら自分が集めた情報を伝えてくる。買い物が増えてるルフィ少年を探してみると言っていたので、情報を集めてくれたのだろう。相も変わらず真面目な奴である。俺だったらやらん。

「情報集めあんがとさん。そのルフィ少年に会う手段はなんとかあったんで、ひとまず酒場行くぞ。詳しい話はそこでなー」

「あら、そうでしたか。分かりました」

そのまま二人を引き連れて今来た道を引き返す。太陽の位置も軌道上の最頂部、今は丁度昼時だろう。

着いた酒場のウェスタンドアを押しして中に入る。

「おう店主の嬢ちゃん、メシ食いに来たぞー」

「あ、は、はい。ちょっと待って下さいね、今用意しますから」

何やら少々動揺しているが、多分新聞で俺たちのことを見たのである。俺も随分と悪名馳せてっからなあ。むしろ、それでもある程度普通の対応を出来ている辺りにこの嬢ちゃんの店主根性が見える。見たところまだロビンと同年か、それとも一つ二つ下程度。若いのに大したものである。

店主の嬢ちゃんに、俺、エドック、ルティア三人分の昼食に加えて船で番をしているロビンの分の弁当も頼む。ロビンだけ一人飯の少々味気ない昼食になるが、留守番係はいつもこうなので今さら気にすることでもない。

「で、例の少年のいる山賊一味のところだがな、明後日そこにいる店主の嬢ちゃんと一緒に行くことになった」

三人でカウンターテーブルに座りつつうちのクルーたちに今後の予定を話していく。

ひとまずルフィ少年と会ってみて、俺が彼を気に入ったならばらくこの島にとどまるかもしれん。ルフィ少年はシャンクス曰く海賊王になると言い切ったらしいので、ちょちょいと鍛えてみるのも

面白いであろうか。

まあ、ロジャーのやつと同じところまで上り詰めるだけの資質が少年にあるのかどうかを見極めるだとか、そんなことをするつもりはないのだが。まったく面倒であるがゆえ。俺の興味が向かうのは、ルフィ少年がはたしてどこまで強くなるのかという、ただその一点のみである。

それにしてもこの店主の嬢ちゃん、山賊のところへ顔を出すと言っていたが、俺たちがいなかった場合護衛はどうするつもりだったのであろうか。山林に住む野獣はもちろん、向かう先は山賊のアジトである。まあその山賊たちも見知らぬガキンチョを預かるぐらいなのだからただの残虐非道な下種どもというわけでもないのだろうが、それにしあって山賊は山賊。そんな奴らのたむろする場所へ一人で足を運ぶつもりだったのだとしたら、この嬢ちゃんは穏やかげな見た目に反して大した肝っ玉である。

「はい、お待ちどうさま」

「あいよ」

「いただきます」

飯が出来俺たち三人の前に定食が並べられる。礼儀正しく食事を始める挨拶をしたルティアの分だけ器が小さいが、まあ体格に見合ったサイズであろう。たまに体の大きさと釣り合わぬ量を馬鹿食いする奴がいるが、ルティアは別にそんなこともない。見たまんまである。

「……心む、五十四点」

ルティアと反対側の俺の隣の席には、出された飯を一口食べて点数を付けるという失礼極まりないことをしている阿呆がいる。店主の嬢ちゃんは見た目十代後半から二十歳といったところであるため、この馬鹿のストライクゾーンからは完全に外れているのだ。ゆえに遠慮も何もなく料理人として味の評価を下したのだろう。誰もそんなことしてくれと頼んだ覚えはないのだが。

店主の嬢ちゃんも苦笑いしながら「あまり料理上手じゃなくてごめんなさいね」と謝っている。が、エドックが幼女の料理以外に五十点越えの評価を出すことは滅多にないので、まずもってこの嬢ちゃんは料理上手な方と言えるであろう。実際美味しい。ちなみに、幼女が作った料理であればエドックは例外なく百点という評価を出す。鼻屑目ならぬ鼻屑舌もここに極まれり。なんともブレない奴である。「嬢ちゃん、うちの阿呆がすまねえな。こいつの言うことは気にせんでくれや、十分美味しい。……さて。それで明後日だが、お前さんはルフィ少年に会うかね？」

店主の嬢ちゃんに軽く謝ってからエドックとルティアに顔を向ける。

「逆に聞くけど、僕が幼女以外に会いたいと思っていると思うかい？」

「うむ、ならお前さんは明後日船で留守番決定な」

「な、なんて巧妙な罠なんだ……」

船番決定に打ちひしがれる阿呆。どうやらこの展開は予想もしていなかったらしい。そして、その数秒後に「まあ、村に幼女もいな

いし船でもいいか」と開き直る辺りも流石である。

「んで、ルティア。お前さんはどうするね？」

「さて、どうしましょう？ ……そういえば、アルマさんは先ほどルフィ君のことを鍛えるかもしれないと仰っていましたが、流石にまだ幼いルフィ君に無茶なことをしたりはしませんよね？」

「……ふむ。 ……ふむ」

「……はあ、これはついていった方が良さそうですね。私も行きま
す」

なんだその「困った人ですね」みたいな呆れの入った目は。俺あちょっと目を逸らしながら唸っただけだったのに。ルティアよ、自分が乗る船の船長のことを少しくらい信頼しようとは思わねーのか。というかお前さん、まだ十四歳のくせに俺の保護者みてーなその物言いはなんなんかい。俺あ泣く子も黙る世界最強なんだぞ。山だつて斬れるぞ。超強いんだぞ。海軍三大将だつてまとめてぶっ飛ばせるんだぞ。ええい、ちくしょうめ。

その後、言い知れない敗北感を感じつつ俺は黙々と食事を進めた。店主の嬢ちゃんから何故か見守るような生暖かい視線を向けられていたが、それは気のせいだったと思いたい。

ただ一つ言えることは、今日のアルマ・クラストールはいつもよりちょっと静かだった。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
http://www.akatsuki-novels.com/stories/index/novel_id~7488

時と海と風と

2015年01月08日 17時00分発行